

あんじょう協働のまちづくりフォーラム報告書

1 開催日時

平成28年8月28日（日） 午後1時30分から3時30分

2 会場

安城市民会館3階 大会議室

3 プログラム

（1）第1部 基調講演

ア テーマ 協働のコミュニティづくり～その必要性と効果～

イ 講師 岩崎 恭典 氏（四日市大学総合政策学部教授）

（2）第2部 身近な地域の協働事例報告&ディスカッション

ア 内容 西別所町における町内福祉活動を通じた協働事例報告

イ パネリスト

若林 正敏さん（西別所町内会顧問）

柴田 福枝さん（民生・児童委員）

吉崎 久弥さん（学校法人さくら学園 グループホームじけい施設長）

古濱 利枝子さん（NPO法人安城まちの学校事務局長）

ウ コーディネーター

岩崎 恭典 氏

4 参加者数

124名（町内会関係者91名、NPO関係者33名）

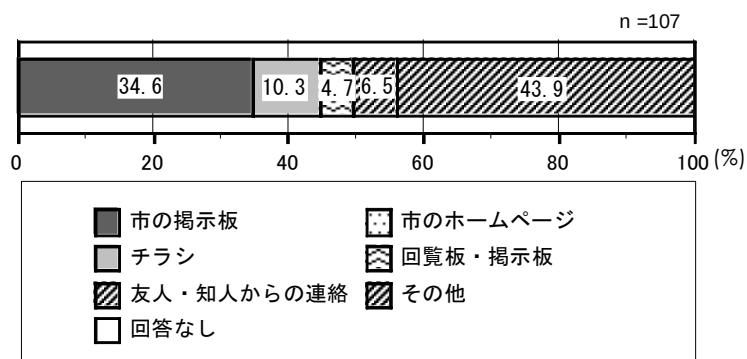
5 アンケート回収数

107枚（回収率86.3%）

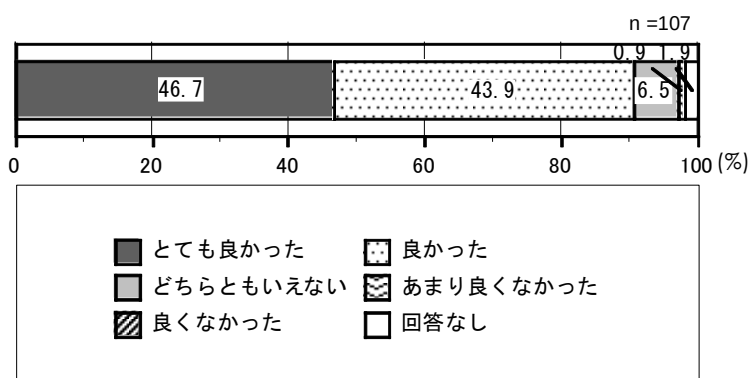
※結果は次ページ以降に掲載

「あんじょう協働まちづくりフォーラム」参加者アンケート結果

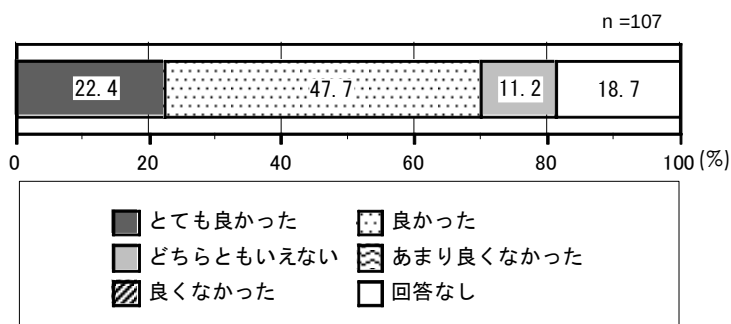
問1 今回のフォーラムの開催を知ったきっかけは？



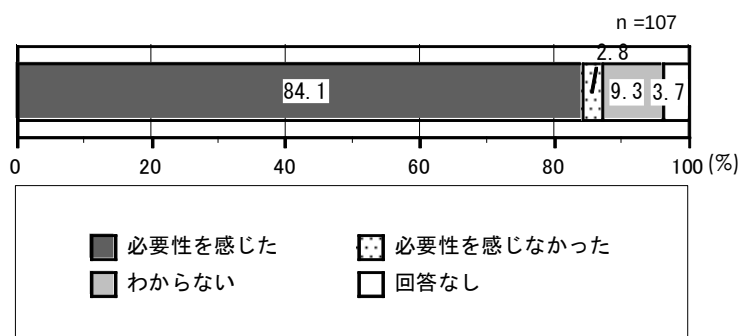
問2 第1部「基調講演」の感想は？



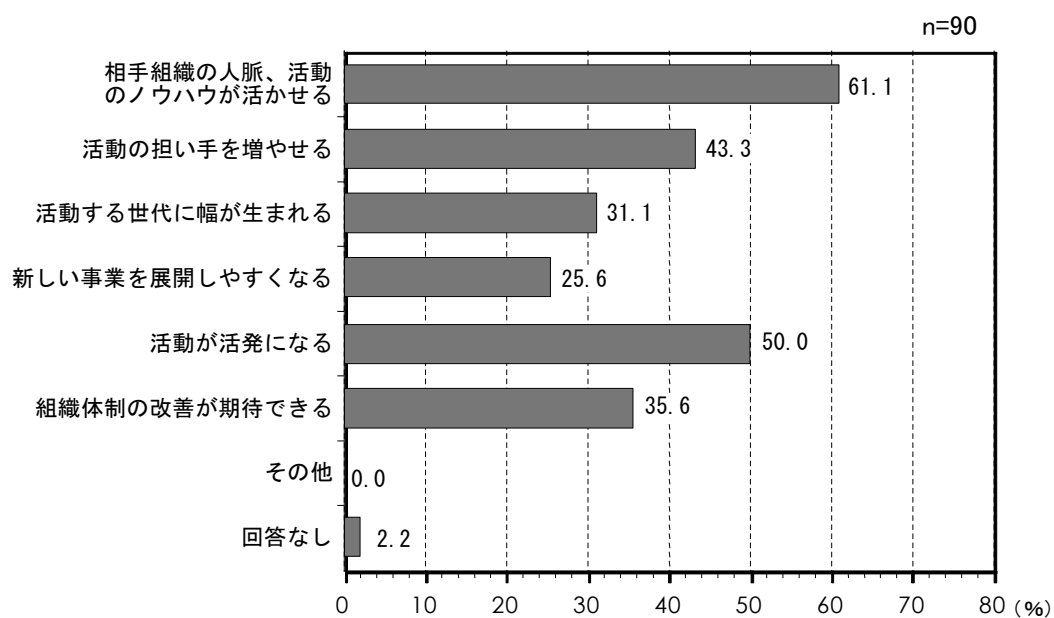
問3 第2部「身近な地域の協働事例報告とディスカッション」の感想は？



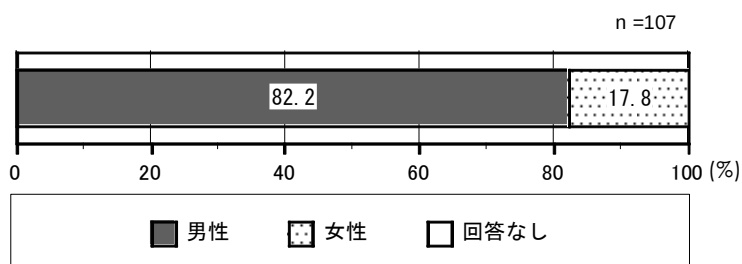
問4 町内福祉委員会等の「地縁組織」と市民活動団体等の「志縁組織」の協働について、必要性感じましたか？



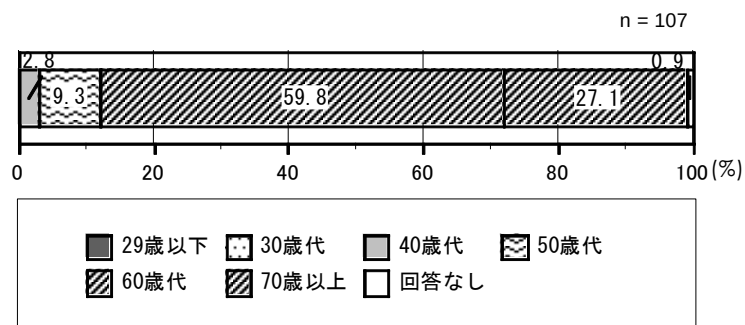
問4 「必要性感じた」と回答した方で、どのような点で必要性感じましたか？



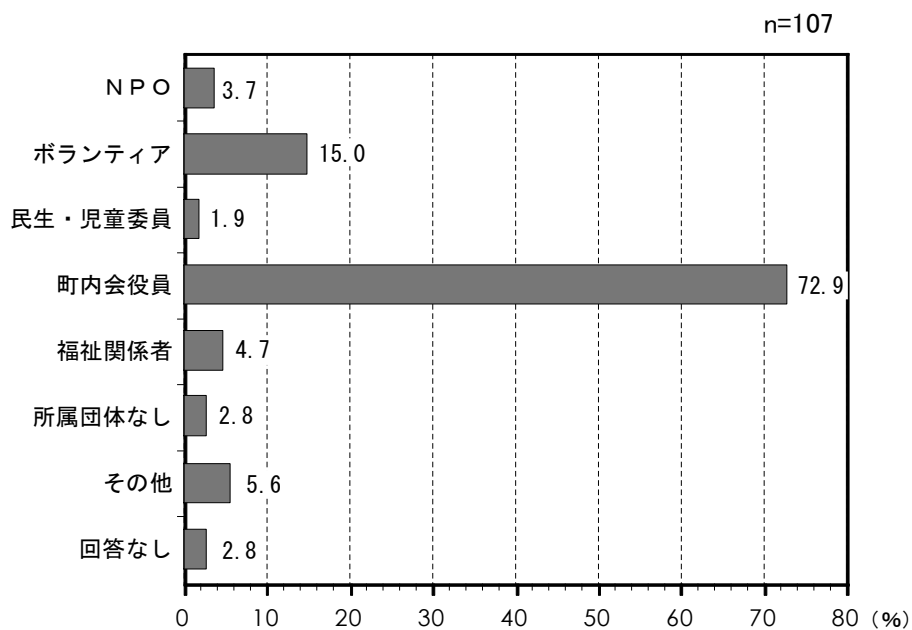
問6 性別



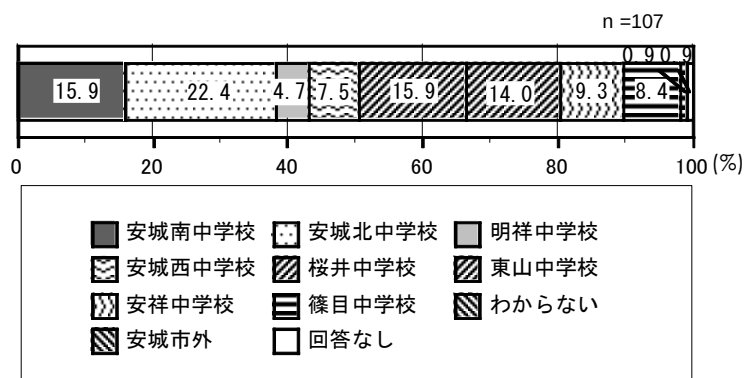
問6 年齢



問6 所属



問6 住まい（中学校区）



問5 自由意見（一部抜粋）

基調講演については、丁寧に噛み砕いて分かるように伝えてもらった。互いに手を取り合い、協働することが大切だと感じた。事例報告では、各地区の人達がしっかり相互協力できていると感じた。
共に将来を見据えることで、今やるべきこと、これからやっていくことが見えてくと思う。今の活動に活気をもたらし、良い循環になってくと思う。地域の中で活動し合うことの大切さをさらに感じた。
今回は岩崎講師による「必要性」の話から導入していただいたので、大変有意義だった。2部のディスカッションでは各協働者の生の声から「効果」を感じた。
協働の必要性は十分認識できた。岩崎氏の公演時間はもっと長くしてほしかった。パネルを利用した部分が少なく、視覚での講演も必要ではないだろうか。今後もこのような機会を設けていただきたい。
介護施設との連携、まちの学校との連携は参考になった。町内で活かしたい。
志縁関係の団体との付き合いを含め、楽しいサロン活動に取り組みたいと思っている。
基調講演の内、2022年問題等、現実を直視している点が参考になった。
構想通りに進んだとして、万事うまくいくかという思いが強い。高齢者で活動できる人の割合では、役持ち率、丈夫率が考慮されていない。地域における老人社会の実情をもっと研究すべき。話は観念的すぎる。老人の中には口先だけの人も多い。
活動には人材が必要。人集めは大変。社会奉仕の精神を持った人材の発掘を如何に進めるかが課題。
私の組は世帯数が250以上あり、組の祭りですら、参加する人が減りつつある。全員が参加するように声掛けをしていきたいと思う。
地域の防災訓練に地域にある施設を取り込む。見守り活動の支援者会議に感心した。地域の情報交換の必要性を感じた。
大変良いフォーラムであったと思う。岩崎先生の話は非常に分かりやすかった。今後も定期的を開催することで、考えが定着すると思う。西別所町の事例報告も参考になった。
町内会の中だけで完結した活動ではなく、専門家の協力を得ることで、幅広い活動となり、地域の人のためになると感じた。
地域と施設との連携でサロン活動、見守り活動の大きな負担が軽減できることが分かり、よいことだと感じた。将来的に災害時要支援者が増加することが予想されるので、認知症理解のためのセミナーなどを開催してもらいたい。
地域を考えるよい機会を提供してもらった。自分にできることを具体的に考えた。協働＝地域たすけ合い＝地域情報（人、金、物、情報）。助け合い支援こそ協働の初歩。

第1部の先生はこのような場に多く出ているようで、話は上手であったが面白みがなかった。第2部は地域密着型で良いと思った。グループホームじけいの施設長が若いことにビックリした。
市民協働の活動推進の必要性を感じた。日曜の開催にも関わらず、大勢の参加があってびっくりした。
地域の特色を活かした活動に、継続的活動を期待する。マンション生活では隣の人の顔が分からないことは地域のつながりでの大きな課題。
私達は専門性のある福祉ボランティアとして参加させていただいたが、どのような協働ができるか考えた。必ずお互いに何かが生まれる助け合いの形がとれるのだろうと感じた。
少子高齢化時代における考え方の転換という点については共感した。名前こそ地域包括ケアシステムということではあるが、本来は近所づきあいで助け合ってきたことを改めて言っているのだと思う。組織のできた志縁もよいが、まずは個々の助け合う心を育むことが大切だと思う。特に退職後の男性にそのような志を持ってほしい。
専門団体との連携。志縁組織にまかせるようにならないか。子どもの参加を多くすべき。町内会組織の弱体化。子どもと高齢者のつながり。継続化、伝承化。
むりのない事でどれだけやれるか。町内の希望をとるようにしたらよい。
岩崎先生の協働コミュニティづくりの大切さが理解できた。将来を考えた時、自分の集落、町内のみでなく、連合町内会としても議論し、お互いが助け合えるよう、一人一役を目標に活動を進めたい。
2050年に向けての大切さを感じた。将来の安城のために。
話では、お金がないので自分達でただで働けと言いたかったように思った。ボランティアでは人が集まらないので、NPO法人ということだと思うが、町内会の方が多かったように思う。個人的には町内会をNPO法人化して小銭を稼いで運営する仕組みをつくったほうがよいと思う。ただ、町内会組織は不透明なので実現はしないと思うが。